

3 「17 世紀における最初の宗教対話についてイメージする:天草のケース」

日時:2025 年 3 月 20 日

於:ルッカ大司教館



最終日となる 3 日目は、イタリア中部トスカーナ州のルッカに場を移し、講演会を実施しました。ルッカ市は、イタリア最大の漫画・アニメのイベント「ルッカ・コミックス」でも知られる町で、高浜さんの同市訪問は、2023 年に「ルッカ・コミックス」に招待されて以来、2 回目です。ルッカ大司教の招待により、大司教館で講演を実施しました。

この日は、現在連載中の漫画『獅子と牡丹』の舞台となっている天草について、特に、同地のキリシタン文化の特徴について、高浜さんが自ら調査を進める中でわかってきたことなどを紹介しました。

禁教令から 2 世紀を経た 1805 年、天草には 1 万人以上のキリスト教徒がいました。特に、崎津地域、2018 年に「長崎と天草地方の潜伏キリシタン遺跡」としてユネスコ世界遺産に指定されたエリアですが、ここでは集落全体でキリシタンを匿い、仏教や神道とともに共存していました。キリシタンの密告には、非常に高い賞金がかかっていたにも関わらず、です。



日本では禁教により、多くの殉教者が出ました。二十六聖人や元和の殉教はよく知られていますが、1637 年から翌年にかけて起きた天草・島原の乱では、およそ 3 万人の犠牲者が出て、そ

の多くはキリシタンであり、その蜂起のきっかけこそは圧政への反対でしたが、主訴は「信仰の自由」だったのです。

この悲劇の後、天草でこれ以上の流血を避けたいという願いから、互いの宗教を認め、寛容する土壌が生まれたと考えられます。

天草の当時の歴史を知るために不可欠な人物がいます。まず、天草の乱の際に幕府軍の鉄砲奉行であった鈴木重成と後継者たるその息子は、乱の後、天草全島の行政を任せられ、年貢の不平等を訴え、是正を促すなど、残された住民らのために尽くしました。

ほかに、長岡五郎左衛門や永田隆三郎といった人物もいました。彼らは、それぞれ、大庄屋、庄屋という、農民らを取り締まる立場にいましたが、自らの命に替えてまで、農民らの生活向上を訴えたのです。

天草の特徴とは何でしょうか？現在は熊本と橋で繋がっていますが、それでも 2 時間半ほどかかる、日本国内で最大の離島自治体です。漫画のストーリーを考えるために、個々の家を訪ねて聞き取り調査を行ったところ、そのルーツが実にさまざまであることがわかりました。一千年以上も前から根を張る、いわば従来の住民に加え、日本の長い歴史の中で、特に 12 世紀から 17 世紀にかけての内戦の度に、敵方に追われ、この地に逃げ込んだ人々がいたのです。船でしか辿り着けない山がちな島嶼地帯は、アクセスの悪さがそのまま、逃げ込み隠れるのに絶好の場所となりました。旧住民と新たな住民がしばしば混じり合いましたが、その時々で彼らの宗教もまたまちまちでした。ここで彼らは、争うのではなく、共存を選んできたのです。天草・島原の乱を率いた天草四郎が、原城の陥落直前の四旬節の頃に、城中の同胞に向けて書いた「四郎法度書」の言葉を紹介し、当時まだ十代であった四郎が、素直で友人思いの人間くさい若者であると同時に、自分たちの問題をよく理解していたとの考察を述べました。

もともとよそ者に寛容であった天草ですが、あまりにも多くの命を失った乱を経て、さらに「多くの命を守るために異宗教間で団結する」という特性が育まれていきました。これは、高浜さんによれば、世界中で人気の漫画『ワンピース』に見られる、日本の人情漫画のメソッドにも共通すると考えられます。そして、教皇フランシスコ(当時)が重要視してきたテーマの 1 つである「諸宗教間対話」を実践してきたとも言えます。他者に対する受入れの寛容さは現代にも受け継がれており、「天草学」として地方政治論の分野で注目されるに至っています。

漫画『獅子と牡丹』は、「天草四郎の埋蔵金」伝説を基に、宝探しをするところから始まります。天草の住民を訪ねて聞き取り、そうした家族に代々受け継がれた史料を紐解き、「呪い」の伝説の残る土地を調査し、見えてきたものは何か。これから漫画の中でどのように発展していくのか、当館としても楽しみにしています。

高浜さんとルッカ大司教区は、本年 8 月～9 月に、天草市において関連の企画展を共催します。また、それに合わせ、ジュリエッティ・ルッカ大司教率いる巡礼団が、天草を訪問する予定です。